

このままじゃ、未来はない 気候危機に立ち上がる

子どもたち

あなたたち大人の多くは、ただの子どもである私たちの声を聞きたくないでしょう。でも私たちは、気候変動枠組条約のメッセージを繰り返しているだけなのです。気候危機の解決策はすでに揃っています。あとは目を覚まして行動を変えさせればいいだけです。私たち子どもは、あなたたちを目覚めさせるために、通りに出ているのです。

——グreta・トゥーンベリ

それは1人の少女から始まった

Fridays for Future（未来のための金曜日）をご存じでしょうか。

2018年に1人のスウェーデンの少女から始まった運動です。当時15歳だったグreta・トゥーンベリさんは、昨年8月、新学期が始まってすぐに、「気候のための学校ストライキ」と手書きしたプラカードを手に、スウェーデンの国会議事堂前で座り込みの抗議活動を始めました。総選挙の候補者たちに、二酸化炭素排出量削減を公約とするよう求めるためです。

両親は何とかやめさせようと説得を試み、通行人は冷たい視線を投げかけました。

しかし彼女は、「気候変動は人類の生存に対する脅威で何より重大な問題だと言いつつ、皆これまでと変わらない生活をしているのは理解できません。温室効果ガスの排出を止めなければならぬなら止めるべき」だと、雨の日も、風の日も、総選挙の9月9日まで、学校のある時間に国会議事堂前に出かけました。総選挙の後は、毎週金曜日に。彼女の決意と勇気、言葉は、多くの若者の共感を呼び、欧州、そして世界各国へ



グreta・トゥーンベリさん

と広がっていきます。今では2,350の都市で180万人を超える若者が、通りに出て気候変動の危機を訴え、積極的な対策を求めています。

アムネスティでは毎年、人権擁護のために卓越したリーダーシップと勇気を示した人物に「良心の大使賞」を授与していますが、2019年はグretaさんと「未来のための金曜日」運動に賞を贈りました。授賞にあたってグretaさんは「これは私だけの賞ではありません。みんなの賞です。私たちが認められつつあることは、素晴らしいです。私たちのやっていることに変化をもたらす力があるとわかって嬉しい」と語りました。

「あなたが、僕たちの未来をダメにしたことを謝ってくれるなら、僕たちも通勤の邪魔をしたことを謝りますよ」

ジェームズ・メイヤーさん
(15歳のアムネスティのメンバー)

6月にロンドンで学校ストライキに参加した時、女性から「あんたたちのせいで、仕事に遅れるじゃない!」と真っ赤な顔でどなりちらされました。確かに道をふさいでいましたが、あなたたちは仕事に遅れるかもしれないけど、政府が気候変動に対してすぐに手を打たなければ、僕たちには将来、仕事すらないでしょう。健全な地球だって。警官には「これで犯罪歴がついたな。おまえの将来はもうおしまいだ」と言われましたが、安定した気候がなければ、どのみち将来はありません。破滅の共犯者になるぐらいなら、犯罪歴のほうがましです。

道をふさいで交通の邪魔をすることが、変化をもたらす良い策とは思えないと、考える人もいるかもしれませんが、でも、こうした行動をとれば確実に話題になるし、気候変動の問題を政治課題にせざるを得なくなる。

気候変動は、無視できる政治問題、道徳問題ではありません。人類の存続に関わること、人権の危機なんです。どうやら、ジェネレーションZと呼ばれる僕たちの世代は、このことを他の人たちよりよくわかっているようです。若い人たちは大人たちから「行動しない」とよく言われます。モバイル機器やソーシャルメディアに夢中になっているのが、そう映るんでしょう。でも、ジェネレーションZは、モバイル技術を使って変化を起こすんです。自分たちが大切にしている信念のために通りに出て変革を求めるのは、僕たちより上の世代の人たちと同じです。ただ、ソーシャルメディアを使えば、誰でも参加できるというのが、ちょっと違いますけど。

気候を壊滅から守る責任が、学校に通う子どもたちの肩にのしかかっているのは、なんとも悲しいことですが、その責任を背負う覚悟はあります。



各地の「未来のための金曜日」運動

上最高の気温45・9度を記録。アラスカやシベリアでも、平年の倍近くとなる20度の暑さとなりました。メキシコでは夏なのに大量の雹が降り、2メートル近く積りました。インドの干ばつ、モザンビークのサイクロン、南アジアの国々での洪水……。日本での集中豪雨被害は、言うまでもありません。国連によれば、世界各地で毎週、死者をもたらす自然災害が起きています。異常気象のせいで飢餓も増加しています。まさに、アントニオ・グテーレス国連事務総長が指摘するように「人類絶滅の危機に瀕している」のです。

こうした中、今年5月、英ガーディアン紙が、これまでの「気候変動」から「気候危機」や「気候崩壊」へと、言葉遣いを変えていくと発表しました。これまでの表現は消極的で生ぬるく、危機的な現状を反映させていないというのが理由です。国際機関などでもより強い言葉を使うようになっていきます。

これまで気候変動は、自然環境への影響という文脈で語られてきましたが、生存権、居住権、健康権など、さまざまな人権を脅かし、すでに存在する不平等を加速させる、人権問題でもあります。対応を先送りすれば、事態は悪化するだけで、未来の世代を破滅に追い込むでしょう。アムネスティでは各国政府による気候変動対策が足踏み状態であることは、歴史上もっとも大きな世代間の人権侵害であると考えています。

「人権と気候危機は切っても切り離せないもの。気候変動によって食物を育てられなくなり、住むところがなくなり、健康が損なわれるでしょう。政府は私たちを守る義務があります。なのに、なぜ気候変動を阻止するために何もしないのでしょうか？」とグレタさんは言います。

「未来のための金曜日」運動に賛同する若者たちは、今、大人たちにも参画を求めています。

人権と気候変動についての初の市民サミット

この9月23日、加盟国首脳が集まって温暖化対策を話し合う「気候サミット」が、ニューヨークで開かれます。それに先立ち、アムネスティをはじめとする市民団体と国連人権事務所が、人権と気候変動に関する初の国際会議を開催します。その翌日、20日の金曜日から、「気候のためのストライキ・1週間アクション」が世界中で始まります。アムネスティは若者たちの声に応えて、できるだけ多くの人がこのアクションに参加するよう呼びかけています。

「未来のための金曜日」運動は日本でも多くの若者の共感を得ています。9月20日、日本では「学校を休んで」ではなく、学校が終わってから各地で「気候マーチ」が行われます。アムネスティ日本のウェブサイトでも場所や時間をご案内する予定ですので、みなさんも、ぜひ、ご参加ください。

ドイツのメルケル首相などは、この学校ストライキを支持していますが、学校を「サボる」という手法に対し、眉をひそめる大人も少なくありません。それに対し、グレタさんはこう言います。「あなたたちの多くは私たちが学校に行かず、大事な授業を受けないことを心配しているでしょう。しかし、あなたたちが科学に耳を傾け、私たちに『未来』を与えてくれたらすぐに学校に戻ります。これは本当に求めすぎでしょうか」。

2018年12月にポーランドで開催された国連気候変動枠組条約第24回締約国会議（COP24）では、集まった約200カ国の代表の大人たちを前に演説をしました。「あなた方は、自分の子どもたちを何よりも愛していると言いながら、その目の前で子どもたちの未来を奪っているのです」と。

気候変動は人権問題

ここ数年、世界中が異常気象に見舞われています。今夏だけでも、欧州が記録的な熱波に襲われ、フランスでは観測史

気候変動から人権を守るために

2017年6月、国連人権理事会は、「人権と気候変動」に関する決議を採択し、気候変動枠組条約の中で人権の側面についても考慮することを求めました。決議では、生命への権利、十分な食糧を得る権利、健康への権利、居住の権利、安全な水と衛生に対する権利など、さまざまな人権が、気候変動によって十分に享受できなくなっていると、気候変動が人権に負の影響を及ぼすことを強調。そして貧困層や先住民族、障がい者など、社会的・経済的に弱い立場にある人びとに対する影響が、最も深刻であると懸念を示し、気候変動対策にあたっては、特にこうした弱い立場のグループの子どもたちの権利、最善の利益を考えていくべきだとしました。また、移民など外国籍の人たちが異常気象に対する情報や支援を得ることが難しくなる、気候変動が原因で国を離れざるを得なくなる人たちがいる、などの課題も指摘しています。

気候変動が及ぼす人権への負の影響に関して、アムネスティは2009年から徐々に取り組みしてきました。そして今、気候変動やその他の環境悪化から人権を効果的に保護するための戦略案を、まとめているところです。政府には気候変動対策を強化することを、企業には化石燃料からクリーンエネルギーへの転換を求めていくことが、核となる予定です。また、アムネスティ自身も、日々の活動におけるCO₂排出量削減など、気候変動の影響低減に寄与するように努めています。